研究ノート

ウェズレー・C・ミッチェルの経済活動観

齋　藤　宏　之

概要

ミッチェルは，マクドゥーガルの心理学の進化論的見地あるいは機能心理学に基づく人間性の見解を手掛かりに，伝統的な経済学の知的謬見が明確になり，その科学的意義も低下すると主張する．

そして，マクドゥーガルの研究業績の意義は，快楽計算法に理論を基礎づけるタイプの人間性の概念が，非現実的であると明言する点と，進化論的タイプの経済理論においては，伝統的な経済理論に対立し，人間性が主要研究対象となり，制度やその進化過程に重点を置くとする点にあるとみている．

こうしてミッチェルは，人間の心の主観的作用よりむしろ，世間一般の高度に規格化されている社会習慣である制度の演ずる役割が，経済学では人間行動を形作るうえで重要となってくると考えるに至る．

また，そうした過程においてミッチェルが，経済学の根底にある心理学理論，つまり経済学の快楽主義的先入観の不自然性・皮相性・不完全性を，独自の制度主義の立場から批判した点を明らかにする．

I　ミッチェルの制度主義

ソースタイン・B・ヴェブレン（Thorstein Bunde Veblen）の傑出した教え子であるウェズレー・C・ミッチェル（Wesley Clair Mitchell）は，先見の明があるとして，当時アメリカを代表する最も優れた量的経済学者だと認められていた．事実，制度学派の権威として著名であったジョゼフ・ドーフマン（Joseph Dorfman）は，ミッチェルを「企業循環分析の父[1]」と呼び，異端ともいえる独創的で進歩的な見解をもつ思想家のなかで，高い尊敬，承認，支持を得た者は後にも先にも彼をおいてほとんどいないと述べている[2]．

さて，そのミッチェルが考える経済学の基本はこうである．人間行動を形作る際，制度は強力な作因となる．したがって人間がどのように行動するのか的確に解明するためには，制度の観点を十分に考慮しなければならない．行動は，制度の複合体である文化の変化過程に関連づけて分析する必要がある．

これに対し正統派経済学は，「人間行動の説明に扮している貨幣経済制度の論理[3]」にすぎないという．つまり貨幣体制の論理を正しく見抜いておらず，金銭制度と人間行動との関連を捉え切れなかった．貨幣制度は累積的過程である経済活動の分野全てに強い影響を及ぼしているにもかかわらず，貨幣が人間行動に及ぼす事実を認識することはなかった．それゆえ貨幣を使用するうえで重要となる習慣についての説明ができなかった．

この見地からミッチェルは，「……貨幣経済，つまり高度に組織化された一群の金銭制度のもつ文化的意義……[4]」に注目した．理論分析は，ミッ

1) Joseph Dorfman, *The Economic Mind in American Civilization* (New York: Augustus M. Kelley・Publishers, 1969), Vol. 4, p. 360.

2) *Ibid.*, p. 376.

3) *Ibid.*, p. 362.

4) Letter to Lucy Sprague Mitchell, October 18, 1911, cited in *Wesley Clair Mitchell: The Economic Scientist* edited by Arthur Frank Burns (New York: National Bureau of Economic Research, Inc., 1952), p.

チェルによれば，制度の複合体である文化を表現していることとなる．正統派経済学を真の内容を欠いている不毛の方法と捉え，経験的知識が有用であると認識し，「論理の実践よりむしろ経験の実証済みの解釈[5]」を目論んだ．

そして上述の貨幣の使用を枢軸に成長してきたのが，ミッチェルのみるところでは，現在支配的な役割を果たしている企業体制全体である．貨幣経済の諸部分が相互依存的に機能して，つまり企業と機械過程が相寄って生み出される企業循環現象を体系的に記述し，循環研究をこれまでの思弁的段階から脱却させる．ミルトン・フリードマン（Milton Friedman）が1950年当時，景気循環論の事実上全ての要素は，ミッチェルの『企業循環』（*Business Cycles*）に組み込まれていることが分かると述べたのも首肯できよう[6]．ミッチェルは，貨幣経済の帯びる性質を把握し，企業循環を研究するうえで展開された考え方を用いて，経済理論を再構築しようと試みた．その際経済理論の成長を発生論的に捉えるべく，経済学者個々の先入観ばかりでなく社会的背景や政治状況も考察し，経験的説明と相互に関係づけられている理論に接近した．

ミッチェルは，現実の企業経験を自然科学者の方法論に可能な限り倣い記述的に分析し，帰納的研究成果を体系的に説明する．統計編集が拡大し改善することにより，経済理論の発展を試みる．つまり統計データを入手し，それを十分に利用して，思弁を経験的にテストする．大量の経済データを統計的手法に基づいて扱い，経済思想から思弁的かつ演繹的な色彩を払拭する．また，この手法によって歴史データの蓄積から有意性を得る．換言すれば，蓄積したデータを統計的範疇のなかで整理し，統計的パターンを組み立てる．経済的一般化が，どの程度経済現状に一致するか明らかにするために，観察を通じて実証分析を行う．その結果，得られた量的データを上首尾に扱うことで，「事実に基づく研究にほとんど着手していない[7]」ヴェブレンの統計的検証の不完全な点を補強した．

こうしたミッチェルの功績は，制度主義において，経験的検証という新たな方向性を付与するに至った．よってベン・セリグマン（Ben Seligman）の「ミッチェルの及ぼした影響力は，経済思想史における名誉ある地位を不動にするほど極めてあまねく行き渡った[8]」とは，けだし至言である．

翻ってミッチェルは，従前の経済学者の人間性の概念を批判するに当たり，ウィリアム・マクドゥーガル（William McDougall）の所説を手掛かりにしている．この批判を念頭に置きつつ，上述のような制度やその変化過程を重視する経済思想の類型をどのように志向していったのか掘り下げていくこととする．その志向過程を辿ることによって，貨幣制度を重要視するに至った理由を解明でき，ひいてはミッチェル独自の制度主義に基づく経済思想の特徴を剔出することにも繋がるであろうと考えている．

そこでミッチェルの「経済活動の合理性：第1部」（“The Rationality of Economic Activity, Part Ⅰ”）および「経済活動の合理性：第2部」（“The Rationality of Economic Activity, Part II”）を取り上げ，検討していくこととする．

66.

5) Arthur Frank Burns, “Introductory Sketch,” in *Ibid.*, p. 24.

6) Milton Friedman, “Wesley C. Mitchell as an Economic Theorist,” *Journal of Political Economy*, Vol. 58, No. 6, December, 1950, p. 487.

7) Wesley C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money and Other Essays* (New York: Augustus M. Kelley, Inc., 1950), p. 302.

8) Ben Seligman, *Main Currents in Modern Economics* (New Brunswick: Transaction Publishers, 1990), p. 200.

Ⅱ　ミッチェルのマクドゥーガル論

マクドゥーガルは，社会科学の研究者向けの著作『社会心理学概論』（*An Introduction to Social Psychology*）を刊行し，心の構造ではなく心の機能を論ずる．この機会に乗じてミッチェルは，経済学と心理学との関係，取り分け経済学者が仮定する人間性の原理の妥当性を検討する．

ミッチェルによれば，マクドゥーガルにとって不可解なことがあるという．それは，心理学，つまり心の科学が「社会科学全てが……築かれねばならないときに基盤にする不可欠の共通の土台と認識されてこなかったのが普通であるし現実でもあった[9]」ことである．マクドゥーガルは，この特異な状況の責任を心理学それ自体のもつ欠点に負わせた．この点をミッチェルは，マクドゥーガルの所説を引き合いに出して確認する．

> 社会科学にとって最も肝要である心理学科が取り扱うのは，人間活動の原動力，つまり心や体の活動を維持し，行為を規制する衝動や動機である．そしてこのことは，心理学科全てのなかで，最も発展の遅れた状態にあるものである．その状況において最大限の不明瞭，不明確，混乱がはびこっている．……それゆえ社会科学のそれぞれの研究者は，心理学における何らかの確立した一団の真理がないときに自らの特有な問題を取り扱っており，心についてあれこれ仮説を立てざるを得ないので，その仮説をその場をしのぐものとした．そしてこのようにして研究者は，各々が必要とする最小限度の心理学説を提供した．これらの仮定は，多くの場合，研究者にある程度のもっともらしさを与えるのに十分な真実をもっている．しかしそれらの仮定は，より正確かつ詳細な心理学に関わる分析をする余地はなく，またその分析の必要性を隠すような大雑把な性格を帯びるのが普通である[10]．

そしてミッチェルは，マクドゥーガルの経済学をめぐる見解を引用する．

> 古典派政治経済学は，心理学における誤った仮定から引き出した誤った結論だらけといえば，全く真実といったものがないわけではないにせよ，名誉毀損である．……古典派政治経済学の重要な仮定は，人間は合理的な存在であり，それゆえ自らの利益を聡明に追求するのが常であり，活動する際常に賢明な利己心が導くというものであった．そしてこれは……心理的快楽主義と結合しているのが常であった．……つまり利益は快楽と同一視された．……しかし人間は僅かしか合理的ではなく，全く理性を欠いて大部分は極めて愚鈍に動かされる[11]．

古典派経済学者の導く結論は，マクドゥーガルの主張によれば，心理学における誤った前提と密接に結び合っているから，事実と一致しないことが多い．マクドゥーガルは，経済学説の最近の進歩は，「心理学におけるあまり不適切でない土台を求める必要性を認めること[12]」にあるし，そこから生じているのが大部分であるとする．

マクドゥーガルは，心理学における間違ったあるいは不適切な仮定を批判した．心理学者は，「自身の科学を意識の科学と無益かつ狭隘に考える[13]」のを止め，それを「心が機能する全ての様

9) Wesley C. Mitchell, "The Rationality of Economic Activity, Part I," *Journal of Political Economy*, Vol. 18, No. 2, 1910, February, p. 99.

10) William McDougall, *An Introduction to Social Psychology*, (Boston: John W. Luce & Co., 1916), p. 1.

11) *Ibid.*, p. 11.

12) *Ibid.*, p. 11.

13) *Ibid.*, p. 15.

相および様式における心の実証科学[14]」いっそ「行為の実証科学[15]」と考える方を好んで初めて，社会科学の研究者の役に立つことができる．心理学は客観的観察を信頼し，「心の進化的な自然な生長[16]」とならねばならないから，「われわれの構造の最も根本的な要素，つまり心の生得の性質を構成する思考ならびに活動の生来の傾向を十分かつ正確に説明することを目指さなければならない[17]．」

マクドゥーガルは「行為の実証科学」に向かう構想を規定する．これは「直接的にせよ間接的にせよ本能は人間活動全ての原動力[18]」に関わり，行為の科学はこれらの原動力つまり本能の研究に変容する．本能には三つの部分がある．すなわち，心の過程の認知的局面に該当する求心性の部分，感情的局面に該当する中心的部分，動能的局面である遠心性の部分，これである．求心性および遠心性の部分は修正を受けるが，中心的部分は修正されないので，中心的部分の初期情動が最も重視されねばならない[19]．「人間の主要な本能およびそれに対応する初期情動は，逃避・恐怖，反感・嫌悪，好奇心・驚異，好戦性・怒り，自己卑下・服従，自己主張・高揚感，父性本能・愛情ある衝動である．さらにそれ程明確ではない情緒的性癖を帯びた本能がある．生殖・群居性・略奪的・建設的本能である[20]．」

本能に加えて心には性癖がある．これは生得であるが性質は多面的・一般的であり特異的ではない．最も重要な性癖は，暗示・模倣・同情・遊戯性癖・「あらゆる過程が，以前に発生しているのでこれまで以上に容易に繰り返される性癖[21]」つまり習慣の法則である[22]．

引き続いてミッチェルは，マクドゥーガルが心の過程を示すことに注目する．その際情緒的局面を最前面に据える．マクドゥーガルは，最も重要な情緒がどのようにして発展するかを示し，活動を規制するうえでこれらの情緒がいかなる役割を演ずるか明白にするという．

マクドゥーガルは，未熟な心理学理論を用いないし，「快楽主義学説は現在十分に論破されているので，快楽主義を……念入りに批判することは必要である[23]」とすら考えない．ミッチェルは，マクドゥーガルの見解を引用する．

> 快楽・苦痛は，それ自体活動の動因ではなく，せいぜい無目的な運動の動因である．むしろ本能過程を修正するのに役立つ．快楽は何らかの行動様式を維持し引き延ばすのに役立つし，苦痛は行動様式を途中で終わらせるのに役立つ．快楽・苦痛が促進したり規制したりしているなかで生み出されるのが，……本能自らの運動の修正・適応である[24]．

マクドゥーガルは，習慣は本能から展開されるとし，心が習慣を形成する性癖を一般の生得の性癖あるいは疑似本能に含め，特定の習慣を「後天的活動様式[25]」として扱う．その活動様式をめぐって「習慣は本能に仕えるときにしか形成されない[26]．」最初は漠然とした本能的活動を心と体の高度に明確で規則的な活動へと規格化するこの習慣形成過程においてこそ，快楽・苦痛は関与する[27]．それゆえ人間がどのように活動するか研究する際，習慣と本能を扱わなければならない[28]．

14) *Ibid.*, p. 15.
15) *Ibid.*, p. 15.
16) *Ibid.*, p. 15.
17) *Ibid.*, p. 15.
18) *Ibid.*, p. 44.
19) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 101.
20) *Ibid.*, pp. 101-102.
21) W. McDougall, *op. cit.*, p. 115.
22) *Ibid.*, pp. 101-102.
23) *Ibid.*, p. 17.
24) *Ibid.*, p. 43.
25) *Ibid.*, p. 43.
26) *Ibid.*, p. 43.
27) *Ibid.*, p. 179.
28) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 103.

ミッチェルは，人間活動を合理的であると考えることは誤りであるとするマクドゥーガルの主張を踏まえ，結びの段落を引用する．

> 読者に社会生活は賢明な私利あるいは快楽を求める知的欲求と苦痛からの嫌悪が動かす個人活動の合計であるだけではないことを納得させるのに十分述べてきた．また読者に社会生活を作り上げる複雑な活動全ての原動力は本能と，全ての人に共通しており人類の遠い祖先に深く根を下ろしている本能以外の性癖のなかで求められなければならないことを示すのに十分述べてきた[29]．

ミッチェルは，マクドゥーガルの以上の見解を基に，他の経済学者が心理学についてどう考えていたのか，次のように述べている．

アダム・スミス（Adam Smith）は，人間性の知識をスコットランドで得，「あらゆる人々のなかにスコットランド人がいる[30]」と考えた．それゆえ「あらゆる人が自分の状況を改善しようと一様に，着実に，絶え間なく努力する[31]」のを当然視した．この心理学的前提が，アダム・スミスの「自然的自由の明白かつ単純な体系[32]」の要石であった．

トマス・ロバート・マルサス（Thomas Robert Malthus）は，「両性間の情欲」を根深い人間の本能として描いた．デイヴィッド・リカード（David Ricardo）は，合理的な人間性の見解を「賃金鉄則」と結びつけた．ジェレミー・ベンタム（Jeremy Bentham）は，行為の快楽主義理論を練り上げていた．ジェームズ・ミル（James Mill）は，ベンタムの系統立った快楽主義とリカードに潜在する経済活動の概念とを統一した．人間性を枢軸にナッソウ・シーニア（Nassau Senior）らが推し進めた方向は，ジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill）が引き継いだ．

ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ（William Stanley Jevons）は，価値と分配の考察をベンタムから引き出した快楽・苦痛の理論に基礎づけ，快楽主義学説を論理的に適用し，静態に研究領域を限定した[33]．

ミッチェルは，ジェヴォンズ以降，少なくとも４つのタイプの経済理論の生起を看取する．そのうち２つのタイプは，J. S. ミルやジェヴォンズが述べた論理の整然とした狭隘な方向に沿ってさらに展開している．もう１つのタイプは，リカードとミルをより自由かつ現実的に利用する方向に転換している．そして残りのタイプは，進化論的思想の浸透に起因する．ミッチェルは，マクドゥーガルの仮定の趣旨を，これらのタイプの理論の異なる目的・方法に鑑みて考慮する．

マクドゥーガルの立場に立つと，快楽主義の前提は実在しないとミッチェルはいう．それでパンタレオーニタイプの理論は，非ユークリッド幾何学とかなり類似している．その前提は仮説の範囲内で明らかに真である．経済学は真の科学であるけれども意味のない科学となる．非ユークリッド経済学は，心理学に関わる必要はないとミッチェルは考える[34]．

ミッチェルのみるところでは，経済学者の間で非ユークリッドタイプの理論の信奉者はごく少数である．これは，経済学者が意味のない科学に甘んじていない結果である．しかし，日常経験の現象を理解し説明しようとする際，経済学者は事実に反する仮定を意図的に使用することがよくある．その方法は，合理的物理学者と比べれば，高

29) W. McDougall, *op. cit.*, p. 351.
30) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 104.
31) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*（Tokyo: Charles E. Tuttle, 1979）, p. 326. 大内兵衛，松川七郎訳『諸国民の富（二）』岩波書店，1960 年，360 ページ．
32) *Ibid.*, p. 651. 大内兵衛，松川七郎訳『諸国民の富（三）』岩波書店，1965 年，502 ページ．
33) William Stanley Jevons, *The Theory of Political Economy*（London: Macmillan, 1888）, pp. 265, 269.
34) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 108.

次元ユークリッド空間の幾何学者の方法には類似していないとミッチェルは捉える[35].

この趣旨で正にジェヴォンズは，その著『経済学理論』(*The Theory of Political Economy*)を「効用・苦痛の計算法[36]」に基礎づけたし，自身の成果を「効用と私利の機構[37]」と呼んだ．アーヴィング・フィッシャー（Irving Fisher）は，「力学的交点の見地から[38]」価値･価格を精緻に論じた．このタイプの理論を，ジョン･B･クラーク（John Bates Clark）は明確に実証した．

マクドゥーガルの見地から機械論的タイプの経済学がもつ心理学における単純な前提は不適切であり，人間性をマクドゥーガルのように扱うなら，私利の機構の調子を狂わせるとミッチェルは考える．

ミッチェルによれば経済学者でも，論理の理法や制度の要求に敏感である心の性向をもっていると，私利の機構を改善してきた．私利の機構が注目に値するのを疑うなら，マクドゥーガルが力説する全てを認めることができる．現実的気質をもっている人にとっては，快楽計算を用いることによって妥協してきたから，論理的正確さは科学的色合いがあるというよりむしろスコラ哲学が感じられる．アルフレッド・マーシャル（Alfred Marshall）は，この折衷主義のタイプの理論を本領を発揮して記述していると捉える[39].

マーシャルは，『経済学原理』(*Principles of Economics*) 序文において「『経済人』の活動に関して抽象科学を構築しようとすることは……うまくいかなかった[40]」と述べ，「規則的である活動[41]」を排除しようとした．ミッチェルは，マーシャルの所説を引き合いに出す．

> 強調した事実は，『金融業者』の活動から庶民の活動への連続的な漸次的移行があることである．『金融業者』の活動は，意図的で遠大な計算に基づいており，精力的かつ才能を用いて実行されるのに対し，庶民の活動は実務的に自らの業務を処理する力も意志ももっていない[42].

ミッチェルはそこでこう述べる．

> 論理の理法に対する感受性が折衷主義の不協和音によって感情を害されるほど鋭敏でなければ，現実主義者として，その人間性の概念は非現実的であると明言する心理学者に注意を払う運命にある[43].

これに対しミッチェルは，進化論的見地に立つ経済学者の考えを次のように述べる．

> 進化論的タイプの経済理論においては，人間性は最初から引き継がれてきた既製のものではなく，帰結が展開されねばならない公準でもなく，それ自体主要研究対象と考えられる．経済活動がこのように研究されると，大きな重点が制度に置かれていることが分かる．制度は個人行動を規格化するからである．制度はそれ自体心理に関わる存在である．思考・活動の習慣であり，観察中の共同社会で支配的である．求められる解釈は発生論的である．つまり受け入れられている経済的思考習慣は，これがいつどのように以前の文化状況のなかで生じたか，その思考習慣はいかなる抑

35) *Ibid.*, pp. 108-109.
36) W. S. Jevons, *op. cit.*, p. 23.
37) *Ibid.*, p. 21.
38) Irving Fisher, "Mathematical Investigations in the Theory of Value and Prices," *Transactions of the Connecticut Academy of Arts and Sciences*, 1892, vol. 9. p. 24.
39) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p.110.
40) Alfred Marshall, *Principles of Economics* (London: Macmillan and Co., Ltd. 1920), p. 3.
41) *Ibid.*, p. 3.
42) *Ibid.*, p. 4.
43) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 111.

制・発展を受け新たに利用されてきたか，思考習慣と共存している他の制度をどのように修正し他の制度によって修正されてきたかを示すことによって説明される[44]．

ミッチェルは，このタイプの異彩を放つ経済理論として，ドイツのグスタフ・フォン・シュモラー（Gustav von Schmoller）やヴェルナー・ゾンバルト（Werner Sombart），イギリスのシドニー・ウェッブ（Sidney Webb），アメリカのヴェブレンの研究を挙げ，「そのような研究にとって，人間の心およびその作動形態を知ることは，マクドゥーガルが想定しているように，不可欠な素養の部分である[45]」と述べる．

ミッチェルは，進化論的仮説は経済学研究にも役に立ち，近代科学にも調和している心理学概念を案出しようとしており，一定の成果も認められるという．

ミッチェルは，マクドゥーガルが，進化論的タイプの社会科学を当然視しているとする．心理学者同様，将来経済学者も「心の進化的な自然の生長[46]」を重要視するようになる．心理学と正式に接触しないタイプの理論は陶冶され，人間性の常識的見解が進化論的考えによって修正されるにつれ，伝統的な経済学の科学的意義も低下するとミッチェルはみる．

Ⅲ　経済学と心理学

心理学における知識が経済学者の助けになることが認められるなら，マクドゥーガルの立場から伝統的な経済心理学は批判されるとミッチェルは捉える．この批判の主要点は，古典派経済学者は人間が「理性をもった生物であるから，自分自身の善を常に理性的に追求しているか，あるいは活動する際常に賢明な私利によって導かれる[47]」と思い込んでいたことである．マクドゥーガルは「人間はほんの僅かしか合理的ではなく，大部分はかなり不合理に極めて愚鈍なやり方で動かされる[48]」と考えており，経済学者は「知的謬見[49]」を犯してきたとする[50]．

そこでミッチェルは，心理的非現実性に鑑み，一般的に立てられている心理学における仮説を説明する．２点の消費財を交換するうえで，需要表は変化する限界効用をめぐる明確な考えに基礎を置く．財の限界効用の変化および労働の連続時間の負効用の変化を示す図式を用いることによって，状況全体がさらに不自然になる．

経済学者にとって，数値例や図式という道具一式は，仮定の本質的特徴を説明するための便利な工夫に過ぎない．さらに進んで利用される理論上の結論は，その結論の有効性を，論証の不自然な特徴に頼ることはない．ミッチェルは，心理学における限界効用理論の仮定をめぐって説明をさらに続行する．

ほとんどの目的に対し，心理学に関わる仮定の一覧表が限定されるのは，労働の嫌悪，財の消費から引き出される満足感，労働と消費が進むにつれて第１財の強度が増加し第２財の強度が減少すること，古い欲望が部分的に満たされるにつれて新しい欲望が発生すること，将来の満足より現在の満足を選好すること，最も容易な既知の方法で目的を達成するように単純な状況に従って認めたり活動したりするのに十分な知性である[51]．

44) *Ibid.*, pp. 111-112.
45) *Ibid.*, p. 112.
46) W. McDougall, *op. cit.*, p. 15.
47) *Ibid.*, p. 11.
48) *Ibid.*, p. 11.
49) *Ibid.*, p. 380.
50) Wesley C. Mitchell, “The Rationality of Economic Activity, Part II,” *Journal of Political Economy*, Vol. 18, No. 3, March, 1910, p. 197.
51) *Ibid.*, p. 198.

そこでミッチェルは，経済学者の「知的謬見」，換言すれば「経済活動はその背後に合理的動機をもっており，より高度の心的能力を働かせる[52]」と誤解している点を，次のように掘り下げていく．

> 経済活動は，考慮している目的が達成されるであろうときに頼る手段を新たに考え出すこの主に知的な過程が常に方向づけると想定されていないことは当然である．それどころか人間の合理性は，経験が有効であることによって示された定着した慣例を実用的に受け入れたことによって説明されるのが普通である．しかしこの慣例それ自体は，性質に関しては合理的である．産業・企業技術の進歩を通じて年ごとに益々合理的になる．財を作ることは今日自然科学を利用することによって導かれている．そしてこの自然科学は，非人格的因果関係の見地から現象を著しく合理的に考察する．合理性の正にその極致は，既に経済生活の特徴をよく示している巨大産業設備の産業組織・管理が示している．そしてその産業組織・管理の支配力を増しつつあるのも明らかである．同様に金を儲けることは，経済生活の金銭的様相であり，会計という考案物によって体系的かつ非人格的に現在導かれている．この技術形態は，数学に若干関連をもつ．この点産業技術が物理学・化学と若干の関連をもつのと同じである[53]．

ミッチェルによれば，産業・企業活動が管理されるときに従う計画が合理的であることは，その計画を遂行するうえで関与する活動も同様にそうであることではない．経済理論は，知性が演ずる役割を伴う活動とそうでない活動との相違を見落としてはならない．つまり習慣の事実，示唆への服従，模倣性癖，構成本能を重視すべきである．

また合理性の仮定は消費活動に合致しない．個人の貨幣支出は，企業の目的に基づくものほどは計画化されていない．「一時の気まぐれ，価格に無頓着，質の無知，従来のやり方に対する執拗な選好に残されている範囲は広い．マクドゥーガルの言葉遣いでは，習慣，被暗示性，競争・模倣本能が取り入れられなければならないのは，流行への屈従，誇示的浪費，広告者へのぞんざいな依存を説明しようとする場合である[54]．」ミッチェルの分析では，合理性の仮定ではこれらの事実は説明できない．

産業の技工法や管理方法としての会計は，人類が少しずつ学習してきたことである．現状を理解するには，これらの方法を当然視してしまっては十分でない．それどころかそれらを説明することが経済学者の主要課題である．労働に対する嫌悪，欲望を満足させられること，新しい欲求が生ずること，将来よりも現在の満足を選好すること，最小の努力で満足を手に入れるように活動する際発揮される知性は，説明すべき事実である．ミッチェルの見解では，経済的合理性は，民俗学が後天的な習性であることを立証している点に鑑みて，強固な基盤ではないから，そのうえに精巧な理論的建築物は構築できない．経済的合理性は，習慣に戻って，そして習慣から本能に戻って研究しなければならないとミッチェルは考える[55]．

経済的合理性の仮定は，経済学が狭隘に専門化するにつれて，社会的起源を有する概念が演ずる役割を誤解しているがゆえに不適切である．個人は自らが属する社会集団に流布している概念の人類の蓄積は最も価値ある資産であり，正式な教育・非公式教育によって経験しているうちに個人が漸次身につけるよう教えられる．そこでミッチェルは，次の見解を披瀝する．

> 習慣概念は合理性に土台を提供する．長い経

52) W. McDougall, *op. cit.,* p. 44.
53) W. C. Mitchell, *op. cit.,* p. 199.
54) *Ibid.,* p. 200.
55) *Ibid.,* p. 201.

験によって妥当であることが判明した観念が論理的に形成されると，その観念の修練で身につけたものは，省察している個人を訓練するし，自分自身の計画の方針を立てるし，その観念を利用することなく達成できる以上にはるかに活動を知的に管理することを可能とする．

……社会概念は社会制度の核心である．社会制度は支配的な思考習慣に過ぎず，これは行為を規定する規準として世間に認められている．この形で社会概念は個人に対して一定の規範的な影響力を得る．社会集団の成員全てがこれらの社会概念を日常使用することが，個人を知らぬ間に共通の型に入れて作る．独創的に活動することを望む人の方向に明確な障害を置くこともある．最後に社会制度を作り出す概念の非常に組織的な体系は，それを作り出したものからの独立を成し遂げるし，決して意図されなかった客観的な結果を生じさせる．不測の論理展開，様々な要素間の不測の対立，敷設された系統に沿って活動した不測の結果，全てが時々起こるし，制度が流布している共同社会に作用し合う．個人の習慣がそれを実行する人に作用し合うのと非常に似ている[56]．

如上の見地から，理論家は深刻な誤りを犯しているとミッチェルはみる．経済学者は，現状を説明するうえで，現代人が漸次使用するのを学習してきた「例えば，所有権，労働，道具，交換，貿易，奴隷制度，倹約，貨幣の概念[57]」を，当然のこと，人間として生まれつき備わっている能力，属的に人間であるものであるかのように扱うからである[58]．

理論家は，これらの概念の及ぼす影響を過小評価し，進化的問題を未処理のままにすることによって，「自らが論じると公言する現象の制限範囲の帯びる真の性格の意味を理解することを妨げられる[59]．」

ミッチェルは，アダム・スミス以降，経済学者が金銭概念をどのように扱ってきたか辿ることによって考察をさらに進めていく．

アダム・スミスの貨幣の扱いは，主に，重商主義に対する反動が作り上げた．注目の的は，貨幣ではなく生活必需品・便益品およびこれらが生み出される労働である．貨幣価格，貨幣所得，金儲けに没頭することを表面的な現象として取り扱うアダム・スミスが作った前例に，その後継者は今日まで従ってきている．ミッチェルは，J. S. ミルの引用文に注意を促す．

手短にいえば，社会組織において貨幣ほど取るに足らないものであるはずはないのが本質である．重要であるとすれば，それは時間や労働を節約するための考案品の役に扮することにおいて以外ない．貨幣がなくても，敏速かつ便利ではないものの行うことができることを，貨幣はより敏速かつ便利に行うための機械である．そして他の多くの種類の機械と同様に，変調を来すと独特の明確かつ自律的な影響力を及ぼすに過ぎない[60]．

ミッチェルは，貨幣は経済理論の本体とは独立して論ずるべきものであるとされている点に注目する．経済学者は，ミッチェルのみるところでは，事物の貨幣的表面下に何があるかに関わっていると想定されていた．リカード世代においては，経済的利害は快楽を獲得することであった．ジェ

56) *Ibid.*, pp 203-204.
57) *Ibid.*, p. 204.
58) *Ibid.*, p. 204.
59) *Ibid.*, p. 205.
60) John Stuart Mill, *Principles of Political Economy : with Some of Their Applications to Social Philosophy*（Fairfield: A. M. Kelley, 1987）, p. 488. 末永茂喜訳『経済学原理』第3分冊，岩波文庫，1960年，112ページ．

ヴォンズは，自身の著作の基礎を快楽計算に置くことで，経済理論の古い論理を完成させた．「次に続く著述家たちは，表面下にあると自らが想定する形而上学的現実に益々専念するにつれて，それだけ首尾よく金銭的現象を無視することができた[61]．」

引き続きミッチェルは，マーシャルについてこう述べる．

> ……マーシャルは，金銭概念が人々の心の要素となり，思考習慣を作り出す際に関わる適切な深い理解を見せていない．認識していないことがある．経済的合理性は，快楽主義的土台に還元しているけれども，貨幣経済が生み出すのがほとんどである点である．その結果として，近代の状況全体を作り上げるうえで本質的な要因が，一見したところ皮相的にみえるもの，つまり貨幣であったことを理解できていない．このように事実を把握することができるようになるのは，経済問題を進化論的見地から，つまり機能心理学に鑑みて理解する場合しかない．
> ……
> 機能心理学の見地から，貨幣の使用を皮相的というのは皮相的である．何世紀もかけて人々は貨幣の使用を支配してきたけれども，その間金銭概念は人々を益々巧妙に支配してきているからである．制度を作ったのに制度から抜けられなくなってしまっているのがほとんどである[62]．

貨幣の使用によって，個人の心の努力が省かれ，個人の経済効率は，公分母である貨幣の見地から，経済財を扱う意識的習慣を学習することにより高まる．これは，個人の思考・活動を規格化することと同時に起こる．金銭概念の使用は，理性を使用するうえで人間を訓練する．企業取引において金銭価値に専ら注意を集中すること，あるいは会計によって管理され金銭利潤への寄与に基づいて判断される行為を毎日繰り返すに至る．つまり経済的合理性の体系である．これにより，対立的な本能的衝動は抑圧され，利益のない習慣から放逐され規範的に支配される．金銭的に成功すれば賞賛され，金銭的に失敗すれば不快の念を引き起こし軽蔑される[63]．「結局，金銭概念が構成する体系は，社会全体の管理をある程度まで越えているし，人間が意図しない結果を時々生み出す．貨幣・金融制度，企業間信用をめぐる慣行，営利企業の金銭組織，政府の金融政策，価格体制の内的調整，証券市場組織，全ては貨幣経済の特徴である．これを人間は作ってきたが，結局それらの支配下に入ることになった[64]．」

こうしてミッチェルは，過去に起因する金銭概念の使用が，現時の経済体制を形作るうえで大きな影響力を及ぼしていると考え，経済理論が貨幣の演ずる役割を軽視し，発展過程にある要因を明らかにしないのは不十分であると説明する．換言すれば進化過程を無視すると，不自然かつ皮相的で不完全な理論に帰着する．同時代人を，限界効用・負効用の立場から描けば不自然であるとし[65]，ミッチェルはこう述べる．

> 財・労働の限界増分を取り扱う洗練された快楽計算を経済活動の規準として描くことは皮相的である．これは制度に関わる土台や人間の合理性は部分的特徴であることを明らかにしていないからである．経済学者の想像力が作り出す人間は，全ての世代の継承者と比べると，つまり本能の豊かで人種的な遺伝的性質，社会概念という寡婦産，豊富な習慣と比べると，貧弱で型どおりの性質を帯びている

61) W. C. Mitchell, *op. cit.,* p. 207.
62) *Ibid.,* pp. 207-208.
63) *Ibid.,* p. 208.
64) *Ibid.,* pp. 208-209.
65) *Ibid.,* p. 209.

のが事実である．人間の正にその合理性は，その特徴を育てられている制度から得る．人間の合理性は，様々な徹底の度合いで人間に強いられてきた型どおりの体系である．多数の世代の未開の祖先から受け継いできた人間性と矛盾するのが常である[66]．

ミッチェルは，限界効用の厳密な論理的含意が正確に導き出されるほど，それだけ貨幣経済の経済過程の説明としては不十分になるという．財貨を作ることは金を儲けることに従属させられて，経済的階級は，各々の先入観を理解するのに困難を感じる．そして貨幣経済において経済的階級を各々の尺度で鍛錬する．金銭概念の使用に起因する問題を解く理論は，限界効用理論ではなく，心理学における適切な知識に基づき，貨幣経済のなかで推移している経済過程を説明しようとする理論である．限界効用は，快楽主義を人間性の普遍的法則として用い，人類は心理学において金銭論理に対応するものに規定されると描いた．この限界効用の考えではなく金銭概念の使用を重視すると，金銭概念と有用性の概念に関連する問題を明確に理解できるようになるとミッチェルは考え，こう述べる．

> 現在の高度に組織化されている貨幣経済においては，経済活動は金を儲け支出する形を取るのが普通である．……これらの状況は，自らの行為規準をもつ首尾一貫した体系を形成する．金銭利潤を獲得し金銭損失を回避することが，活動に対して貨幣経済が認める比類なき動機である．……完全な貨幣経済の非の打ち所のない創造物の人生の関心は全て１つの公分母であるドルという名辞に還元されるはずである．完全な金銭合理性は，心理学に関わるその創造物の主要な特質であるはずである．
>
> ……
>
> 金銭動機・金銭計算を行為規準として認識し受け入れるよう人々に絶えず繰り返し教え込む環境に慣れ親しむことによって，快楽主義はそのもっともらしさを多く得る．このように過度に合理的な人間性の見解が，金銭概念を利用することで訓練されていない人たちの間で広く受け入れられることができたかどうかは非常に疑わしい．……快楽主義概念の本質的特徴は，経済活動の指導を合理的計算の体系に付与することである．貨幣経済が，繰り返し教え込む合理的計算に似ているのが実体である[67]．

ミッチェルによれば，「それゆえ金銭概念を経済学者が因習的に無視してきたからこそ正に，貨幣経済の事実に明白に一致していない結果を生み出すことはなかった[68]．」経済学者は，合理的計算の帯びる性格を理解していなかった．つまりそのような計算を，金銭制度が発展したことにより人間性に教え込まれてきた思想体系とみなさなかったから，人間は計算器として取り扱われるであろうと軽率に想定してしまったとミッチェルは鋭敏に分析する[69]．

それゆえ，「現代人は，金銭論理の支配を嫌というほど受けており，その結果そのような論理の経済理論をもっともらしく思わせる．しかしこのもっともらしさは混乱した考えに起因しており，金銭論理を無視し続けるあるいは心理学を等閑視し続ける正当な理由にはならない[70]」と述べる．

ミッチェルは，快楽主義的説明は推し進められれば進められるほど，それだけ皮相的になるとする．組織だった企業取引の分野において金銭合理性は最も徹底的に教え込まれているので，金銭合理性の快楽主義的類似物は，生産・分配問題を説

66) *Ibid.*, p. 210.

67) *Ibid.*, pp. 212-214.

68) *Ibid.*, p. 214.

69) *Ibid.*, p. 214.

70) *Ibid.*, p. 215.

明するとき最も上首尾に当てはまるのに対し，富の消費と経済活動の動因を説明するうえではそれ程うまく適用されないとみる．

ミッチェルは，経済学者がどのように金銭概念を扱ってきたか分析してきた．進化論的視点から「金銭概念は皮相的と軽視されるべき一連の空虚な象徴と考える重大な失策を経済学者は犯した[71]．」金銭価値の観念と有用性の観念との関連を捉え切れていないから，受け入れられている企業過程の理論は不自然で皮相的で不完全である．マクドゥーガルの視点に立てば，経済学者が人間の合理性を当然視することは危険であり，伝統的な快楽主義心理学を信頼し使用し続けることは思慮が足りない．

ミッチェルは，より科学的な進化論的タイプの経済理論の展開を看取する．このタイプの理論であれば，合理性が特徴づける抽象的な人間性を措定する必要は論理的にない．習慣・制度が本能から成長してきた過程を追跡することによって，習慣・制度の新たな取得とそれらの古い特徴とが経済行為を規定する際，どのように結合するか考察することを目指しているとミッチェルは指摘する[72]．

大要以上のような所説をミッチェルは披瀝してきたが，引き続き章を改めてそれを整理しながら検討してみることとする．

Ⅳ　ミッチェルの進化論的見地

ミッチェルは，マクドゥーガルの所説を手掛かりに，経済学者が仮定する人間性の原理の妥当性を検討する．マクドゥーガルのみるところでは，古典派経済学は，人間は合理的な存在と仮定し，これが心理的快楽主義と結びついている．マクドゥーガルが，社会科学は「行為の実証科学」であるとし，人間活動の原動力としての本能，心の性癖や習慣法則を重視して，人間活動の合理性および快楽主義が不適切であると考えているとミッチェルはいう．これらの諸点を考慮して，経済学者が心理学をどう捉えるか検討する．

ミッチェルは，快楽計算法に理論を基礎づけるいわゆる「効用と私利の機構」の主流のタイプの内容を解釈したうえで，その人間性の概念は非現実的であると明言するマクドゥーガルの心理学に注目する．

この主流の経済理論に対し進化論的タイプの経済理論においては，人間性が主要研究対象となり，制度やその進化過程に重点が置かれる．この観点からミッチェルは，マクドゥーガルの研究業績の意義を評価する．

ミッチェルは，マクドゥーガルの心理学の助けを借りて，進化論的考えが人間性の常識的見解を修正するにつれて，伝統的な経済学の知的謬見が明確になり，その科学的意義も低下すると主張する．

そこでミッチェルは限界効用理論の不自然性を心理学の立場から説明する．合理性は，産業・企業活動を管理し，合理的性質を帯びている定着した慣例を受け入れたことによって解釈される．しかしながら合理性の仮定は消費活動には合致しないし，合理性の仮定では流行への屈従，誇示的浪費，広告者へのぞんざいな依存は，説明できない．支配的な思考習慣である制度の影響を受けて，個人は共通の型に入れられる．この点にミッチェルは伝統的経済理論の誤りを看取する．

かくしてミッチェルは，アダム・スミス以来，リカード世代の経済学者，J. S. ミル，ジェヴォンズ，マーシャルは，貨幣要因が本質的であることを理解できなかったと捉える．これは進化論的見地からあるいは機能心理学に鑑みて初めて理解できるからである．進化過程，心の機能，貨幣の役割を軽視すれば，皮相的かつ不自然な理論に帰着する．例えば限界効用理論である．一方，金銭概念の使用を重視すると，快楽計算は，金銭制度の発展により人間性に教え込まれた点が明確にな

71)　*Ibid.*, p. 216.
72)　*Ibid.*, p. 216.

る.「金銭概念は皮相的と軽視されるべき一連の空虚な象徴と考える重大な失策を経済学者は犯し[73]」ていることとなり，この理解に基づいて，より科学的な進化論的タイプの経済理論の優越性をミッチェルは主張する.

さてミッチェルの考えでは，人間の生物学的動因・衝動は，行為の社会様式を通して機能する. 人間行動の形を取って現れるときに考察する．行動は，世間一般の高度に規格化されている社会習慣である制度に基づいて説明する. 生物学的動因・衝動は，制度に関わる根本的な行動様式を通して現れるからである．ミッチェルにとって，制度あるいは社会習慣が人間行動を形作るうえで重要となってくる.

本稿でのミッチェルの所説の引用と一部重複するが，もう一度上述の点を確認しておきたい.

> 諸概念のなかで，文明人が蓄積してきた部分はごく僅かである．この非常に小さい部分を越えて，独力で経験という非常に込み入った迷路を打ち負かすとすれば，それは人間の脳のもつ力をはるかに凌駕している．……正式な教育や非公式教育によって，人間は，自らが属している社会集団に流布している概念のかなりの部分を，程度の差はあれ，理解し利用するよう漸次教えられる. ……社会概念は，社会制度の核心である．社会制度は世間一般の思考習慣に過ぎず，この習慣は，行為を導く社会規範として世間に認められている．この形で社会概念は，個人に長年の慣例により認められた一定の権威を握っている．社会集団に属する全成員が，社会概念を日々利用することによって，個人は絶え間なく知らぬ間に共通の型に形成される．独創的に活動したいと望んでも，進路に障害が置かれることもよくある[74].

そこでミッチェルはこう述べる.

> 合理性の土台を見いだすには，……個人の内部で，経験全体から感情要素を抽出し，これらの要素が快楽的性格を帯びているか苦痛的性格を帯びているか判断し，快楽と苦痛との大小を比較する能力を考察してはならない. むしろ個人の外部で社会が徐々に進化させ個人自身が苦労して学習した行動習慣に注意を向けねばならない[75].

ミッチェルは，制度によって人間は合理的に行動するよう習慣づけられると考える.

このミッチェル思想の核心をアラン・G・グルーチー（Allan G. Gruchy）は的確に捉え，次のように巧みに表現している.

> ……可塑的な人間性を過度に合理的な行為という厳格な型に押し込もうとしている制度上の圧力が働いていた．数世紀という短い期間に人類は商業・産業資本主義という拘束服できつく締め付けられてきており，会計室の規準を過度に尊重するよう教え込まれてきた. 中世末に商業資本主義が発展して以来，特別な経済制度が現れて，近代文明の多くを具体化し潤色してきた．これは重要な合理的習慣であり，貨幣制度として知られている．この制度は他の何よりも近代資本主義の色相あるいは精神を決定してきた．金を儲け支出する過程は自らに特有な論理をもっており，その論理を用いて人間は『各種量の異なった財の相対的重要性』を比較検討し，利害を比較検討する見地から考慮する．こうして貨幣制度の及ぼす影響は広がり，他の形の制度化した行動に作用する. それゆえ生活が今日規格化・

73) *Ibid.*, p. 216.
74) *Ibid.*, pp. 202-203.
75) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 170.

合理化されているのは，人間の心に存在する合理性固有の原理の要件によるのでもなければ，個人行動を上から導くと想定されている絶対的知性の漠然とした物質界外の規準によるのでもない．その要件や規準ではなく，先進資本主義社会における貨幣使用の要件によるのである．経済界の至る所に会計室体制は成長し，その影響が浸透しているところはどこでも，人間は生計を立てる自らの様式を，人間行為の非常に商業化された規準に鑑みて調整するように要求されてきた[76]．

またミッチェルは，合理性の仮定によって消費活動は満足に説明できないとみる．金儲けの技法が重視される金銭文化に対して，金を支出する技法は遅れを取っている．貨幣の使用は，金儲けに比べ金を支出する際にはさほど重要な影響は及ぼさない．家計を経る支出は合理的ではない．家計運営には，規格化・合理化されている社会習慣は流布していない．自らの地位を適切に了解させるべく，支出には対抗心や人の妬みを買うような比較を促進することが意図されていることも多い．「一時の気まぐれ，価格に無頓着，質の無知，従来のやり方に対する執拗な選好[77]」を説明する場合，合理性の仮定ではなく，家庭生活に一定の方向を与える習慣的な思考・活動様式に目を向けねばならないとミッチェルは考える．

因みにミッチェルはこう述べる．

金を使う課業において，主婦は，大部分，現在逆説的衝動の勢力下にある．自分自身のためばかりでなく，夫や子供のためにも，価値は金の価値と解釈されるのが普通である世間では，家族は裕福な状態にあると見せなければならない．仲間と比較する際，貧しさがみえると，夫の自己満足をかき乱すかもしれないし，子供が愉快で有益な仲間を作る機会を不利にするかもしれない．それゆえ世才は，主婦の自由になる所得でできる限り華やかに誇示するように勧める．主婦は，欲望や耽美的感覚を満たすために買うばかりでなく，社会の尊敬やそれを御する快適な意識も買う[78]．

翻ってミッチェルは，貨幣は経済生活の媒体であると捉える．そして経済生活を特徴づけるのが，金を儲け支出することである．財生産は，金を儲ける見込みに依存する．貨幣は諸悪の根源ではなく，経済科学の根源であるから，貨幣を経済学が群がる中核にする傾向は助長していくべきであるけれども，表面的な現象に過ぎないと考えられてきた．

従前先天的傾向および非合理的行動が理解されてこなかった．合理性の概念は現代人が使用するのを漸次学習してきたものであるけれども，生まれつき人間に備わっている能力の不可欠な部分と捉えられてきた．合理性の特徴は，人間が育てられている制度から得られる．それゆえ後天的習性である「合理性が特徴づける抽象的な人間性を主張する必要は論理的にはない[79]」にもかかわらず，事実に反し経済行動が合理的であると仮定し，これに基づいて精巧な理論を苦もなく安易に構築してきた．「快楽主義は，人間がいかに活動するかをめぐる理論を提供したからこそ，経済学に強力な影響を及ぼした[80]．」しかしグルーチーの所説をまつまでもなく，「経済生活を合理的にするものは，人間の心が有するある計算能力ではなく，

76) Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought: The American Contribution* (New York: Augustus M. Kelley・Publishers, 1967), pp. 258-259.

77) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 200.

78) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 16.

79) *Ibid.*, p. 216.

80) Wesley C. Mitchell, "Human Behavior and Economics: A Survey of Recent Literature," *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 29, No. 1, November, 1914, p. 47.

貨幣の使用をめぐって構築される制度複合体全体である[81].」既にみたように，人々は制度を作ったのにそれから抜け出せなくなってしまっているのである．貨幣経済は，一連の自らの価値を人間行動に深く刻み込んできた.貨幣の使用によって，人間性は極めて厳格に規格化されるがゆえに，合理性を説明する際，貨幣を使用することを重視する．金銭的概念は，人間に経済生活を合理化するように教え込む．その結果貨幣の使用は，経済生活の合理的理論を立てるための基礎を築く．

セリグマンは，貨幣が人間行動に及ぼす強い影響力をミッチェルが重視した点に着目したうえで，こう述べる．

> 快楽主義は，ミッチェルの主張によれば，一種の金銭論理を表面上反映しているものの，基本的な問題に本気で取り組んでいなかった．快楽主義は，貨幣体制の論理を全く見抜けなかったからであった.……古典派理論は，人間が貨幣を用いるうえでの習慣を説明することはできなかった[82].

またドーフマンはこう述べる．

> 正統派理論は，ミッチェルの持論では，『金銭論理』として再解釈されるべきである．金銭論理は，最も普及した制度である貨幣経済の含意を導き出しているからである．……正統派経済学は『人間行動の説明に扮している貨幣経済制度の論理』である．……貨幣の使用のおかげで人間は合理的に活動できるばかりでなく，自らの欲望を規格化もする，つまり財の見方を強く歪める[83].

セリグマンも，同様にドーフマンの所説に依拠して，古典派体系をめぐっては，人間行動の解釈に扮しているがゆえに一種の金銭論理であるとし[84],「その結果貨幣は，欲望を規格化し，人間の世界観に影響を与えるということを理解できなかった[85]」と考えている．

このように貨幣制度は習慣を合理的にする．グルーチーによれば，「人間は，経済主体として，合理的でありたいと思うのではなく，その代わりに，日常生活において貨幣を使用することに由来する行動習慣によって合理的活動経路を辿らされる[86].」金を儲け支出することをめぐって思考する習慣は，最も重要な制度であり，極めて精巧である．貨幣制度は，現在の文化に照らして最も強い影響力を有しており，貨幣が与える刺激に対して人間は規格的に反応する．金を儲け支出することをめぐって思考する習慣を身につける際，行動を規格化し合理化する．貨幣を利用することによって，経済生活は合理的になる．貨幣を利用することと，そのことが生む思考様式が，近代の状況においては，最も重要な要因となる．経済的合理性は社会現象であり，貨幣の使用が経済生活の合理的な理論を立てる元となる．事実ミッチェルは，「経済理論の現在の傾向のなかで，貨幣の使用を経済分析の中心的特徴にする傾向ほど期待できるものはないように私にはみえる[87]」と述べている．

かくして経済学の内観的分析の底流をなす合理的かつ快楽主義的心理学的理論では，貨幣所得とこれから得られる満足との関連については説明しないから，経済行動の性質を解明することには役立たないとミッチェルは考える．セリグマンは次の見解を披瀝する．

> 価格体制は，期待利益がもたらす企業需要と

81) A. G. Gruchy, *op. cit.*, p. 279.
82) B. Seligman, *op. cit.*, p. 183.
83) J. Dorfman, *op. cit.*, Vol. 4, p. 362.
84) B. Seligman, *op. cit.*, p. 192.
85) *Ibid.*, p. 192.
86) A. G. Gruchy, *op. cit.*, pp. 279-280.
87) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 149.

費用負担能力とを反映するかもしれないが，売買取引のこの表面下にあるのが，貨幣を獲得し支出する社会習慣である．この習慣は，数百年前の昔からある文化に由来していたし，『基本的人間性』と対立する性格型を作り出した．ミッチェルは，貨幣経済が経済発達に大きく貢献したことは否定しなかった．機械過程と連動して，貨幣経済は物質的進歩をかなり増大させてきたからであった．事実，貨幣経済は極めて重要である．会計機構を提供し，相互依存と協調をもたらす装置であったからであった[88]．

そこでミッチェルは，貨幣経済において推移している経済過程を重視しつつ，こう述べる．

……経済制度を研究すると分かることだが，企業会計は家計会計と比べはるかに合理化されている，つまり貨幣計算は効用計算と比べより考え抜かれている．それゆえ経済制度の研究者は，経済論理がその拠点を貨幣も価格もない単一経済において有しているとは想定しない．研究者にとって貨幣は理論分析の強力な道具である．貨幣は，経済統制を体系化するための最も効果的な実用的な道具であるからである．また貨幣の使用は，最も厳格な規律を曖昧なごく自然の人間性に押しつけるからでもある．……当然の帰結として，経済理論は，貨幣を研究の後期にまで後回しする代わりに，最も徹底的に組織された貨幣価格から始めるべきであるということになる．貨幣価格間の明確かつ客観的な関連が分析されてくると，効用をめぐる感情という曖昧で不可解なものを洞察し，人間が企業取引をする際に学習する統制の論理体系が，主観的評価とどのように関係するか研究するのに十分よいときになる[89]．

ミッチェルによれば，「人間性は，最初から引き継がれてきた出来合のものではなく，つまり結論が展開されねばならない前提とみなされるのではなく，それ自体主要研究対象とみなされる[90]．」人間性として認められているものは，一定の制度状況によって生み出される．人間行動は，制度の枠組みのなかで研究しなければならない．

経済学者は，個人の内部から経済行動の研究に取り掛かるのがほとんどであるが，この内観的接近法は，ミッチェルの考えでは，「科学的方法と公言している全ての方法のなかで最も当てにならない[91]．」マクドゥーガルが，その著『社会心理学』において，心の構造よりむしろ心の機能の見地から人間行動の問題を考察している点にも強い影響を受けて，容認されている経済理論の類型の心理学上の公準に対する不信感を一層募らせた．事実ミッチェルは，本稿で取り上げた論文においても，「マクドゥーガルに似通っている著作を読み，その結論を受け入れると，ジェヴォンズ，フィッシャー，クラークが提供するような経済理論がもつ価値に懐疑的になるのももっともである[92]」と述べている．

ミッチェルによれば，経済学は人間行動の科学になり，金銭論理体系，つまり存在しない状況下での静態均衡を機械論的に研究するのに終止符を打つ．人間行動の科学として経済学は，行動する際制度要因が演ずる役割に注意を集中し，人間の心が主観的にどのように作用するかにはそれ程注意しなくなる．

このようにみてくると，グルーチーがミッチェ

88) B. Seligman, *op. cit.*, p. 182.

89) W. C. Mitchell, *op. cit.*, pp. 256-257.

90) W. C. Mitchell, "Human Behavior and Economics: A Survey of Recent Literature," p. 3.

91) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 254.

92) W. C. Mitchell, "The Rationality of Economic Activity, Part I," p. 110.

ルの経済思想を分析する際いみじくも指摘したように，「……人間は自らの回りの世界を過度に論理的に説明していると思い込み，現にあった事実の範囲をはるかに越えている『捏造された理論』を頼りにしがちである[93]．」これまで経済学は，貨幣が欲望を規格化し，人間のものの見方を特徴づけることも認識できなかった．

ミッチェルは自身の見解を総括的に次のように述べる．

> 明らかとなるのは，正統派経済理論は，取り分け最も純化した最近の諸類型においては，人間が実際にどのように行動するのかを説明しているのではなく，むしろ貨幣経済の論理を実際に最後まで追求するならば，人間がどのように行動するのかを説明するだろうということである．いまや貨幣経済は，新しい見地からみると，わが国の文化全体を動かす最も強力な要因であるというのが事実である．実のところ貨幣経済の様式を，一定しない人間性に刻み込み，皆が規格的に与えられる刺激に規格的に反応させられるようにし，何がよくて美しくて正しいかというわれわれ自身の規範とすべきものに影響を及ぼす．貨幣経済制度が，人間行動を型に入れて作る際，いかに力があり勢力をふるっているか最も強力に証明していることは，人間を貨幣経済の申し分のないほど躾のよい子供と暗黙のうちに想定する経済理論の類型が数世代にわたって社会科学として承認を得てきたことである[94]．

こうしてミッチェルは，経済学の根底にある心理学理論，つまり経済学の快楽主義的先入観の不自然性・皮相性・不完全性を，進化論的見地あるいは機能心理学的立場から批判した．貨幣制度に関心を向けられる，つまり貨幣が経済活動において演ずる役割が理解されることで，さらに経済学は進歩すると考えたからであった．

93)　A. G. Gruchy, *op. cit.*, p. 250.

94)　W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 371.